

滋賀県における高校ボート競技の実態と教育的効果に関する研究

秋田 直樹 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)

指導教員 柴田 俊和

キーワード：高校ボート競技 滋賀県 人間形成

1. 緒言

高校時代にボート競技をすることは、人格形成に大きな影響があると私は考える。自己追求型のスポーツであると同時に、仲間との協力、同調が必要なスポーツである。また、目標に向かって計画的、継続的に努力する力を必要とし、自然を相手のスポーツである。このことから、ボート競技を通して、身体的、精神的な成長、そして人間関係にも大きな効果が期待できる。しかし、日本においてボート競技の認知度は低く、競技人口も少ない。

本研究では、ボート競技がいかに高校生に身体的、精神的、社会的な影響を与えているか、滋賀県における高校ボート部の現状を明らかにし、ボート競技者人口の増加、そして競技力向上の手がかりとしたい。

2. 研究方法

アンケート調査

〈調査対象〉

滋賀県の高校ボート部全7校の生徒159名
(男子87名、女子72名)

担当教員7名

〈調査期間〉

2010年11月22日～2010年12月3日

3. 結果と考察

高校ボート競技では、全国大会出場以上を目標に掲げている生徒が全体の約56%と選手にとってそれだけ全国の舞台が身近な存在で選手のモチベーションを高めていることがわかった。

ボート競技には挙げきれないほどの様々な特性が存在し、その分生徒が何かを感じ取り、

成長するチャンスも多い。身体面、精神面の変化では、ほぼ100%プラスの変化を実感していた。また、人間関係能力を育むのにボート部での活動は有効であることがわかった。選手はボート部での活動から何かを感じ何らかの形で自立、自己実現に近づいていることがわかった。

しかし、高校でボート競技の魅力に惹かれても、それを続ける環境が整っていないのが現状であり、生涯スポーツとしてのボート競技が課題であるといえる。

4. まとめ

ボート競技は、しんどさや辛さを乗り越え、最後まであきらめず続ければ絶対に何かを得られるスポーツである。しかし、現状では高校の部活動がボートをする環境の限界であると感じている者が多く、ボートをしたい人がしたいときに気軽にできるような環境、受け皿づくりが必要であると感じた。

自然の中で、目標に向かって計画的、そして継続的に努力を重ね、仲間とともに切磋琢磨しながら、仲間そして自分の成長を実感し、レースでは相手、自分と戦い、その喜びを味わうことができるのがボート競技である。今後は、本研究で明らかとなった、ボート競技の教育的な有効性を多くの人に知ってもらい、ボート競技の素晴らしさを滋賀県のみならず全国でも広めていきたい。

参考文献

宮田勝義著(1976)：改定新版ボート百年(時事通信社)

社団法人日本ボート協会(2004)：Rowing For All 指導者のためのロウイング入門